



陳瑞憲 | 陽明山のすまい [2006]

Ray Chen

中村好文 — イラスト、写真も
Yoshifumi Nakamura



「アジアでもっとも影響力のある建築家のひとり」と評される陳さんは1957年生まれ。故宮博物院にある中国茶と点心の店「三希堂」など、シンプルで品格のある飲食店のデザインでも定評がある[写真: 蘇春瑛]

おとし、住宅設計の仕事で台北に出張していた私は、打合せの合間に誠品書店という24時間営業の大型書店に行きました。この書店は、モダンな開架式図書館のような雰囲気居心地が良い上に、アート、デザイン、建築の専門書の品揃えが素晴らしく、普段、忙しくて本屋に行く時間のない私は、すっかり嬉しくなって長い時間をそこで過ごしました。

じつは、若者に大人気のこの斬新な感覚の誠品書店をデザインしたのが、今回の主人公で、台北を本拠地に香港や中国本土でも活

躍している建築家の陳瑞憲 (Ray Chen) 氏です。

陳さんとは、台北のクライアントが開いてくれたパーティで知り合いました。そのとき、パーティに招かれていたのは、建築家、画家、詩人、作曲家、カメラマンなど、いずれも名のあるそうそうたるメンバーでしたが、流暢な日本語を話す陳さんが、私が30代のはじめに教えていたデザイン学校に留学していたことや、安藤忠雄さんの事務所でアルバイトしていたこともあって、大いに話がはずみました。

陳さんの印象をざらりと紹介するとすれば「才気あふれる気鋭の建築家」ということになりませんが、GIカット風の短い髪と、贅肉のない細身の体躯を包むオシャレな服装、スマートな気配りとスキのない目配り、一同の和やかな会話にスパッと切り込んでいく冗談とも皮肉ともつかないエスプリの効いた発言…。その印象は動物にたとえれば精悍な豹のようでした。

私は、そういう陳さんを観察するともなく観察していて、「ああ、若いころのフィリップ・ジョンソンもきっとこんな感じだったんだろうなあ」と、考えていました。

翌日、私はクライアントや友人たちと一緒に陽明山にある敷地を下見に行きました。そして、このとき、敷地にほど近い場所にある陳さんの自邸「陽明山のすまい」もついでに見学させていただきました。



【建築概要】名称:陽明山のすまい | 所在地:台北市陽明山 | 家族構成:1人 | 建築面積:215m² | 延床面積:215m² | 規模:地上2階 | 構造:S造 | 設計:陳瑞憲

自邸は予想にたがわず…というより陳さんの印象そのままの、贅肉のない、オシャレで、スマートで、エスプリの効いた貴公子的な住宅でした。そしてこのときの見学が、今回の取材の下見になりました。

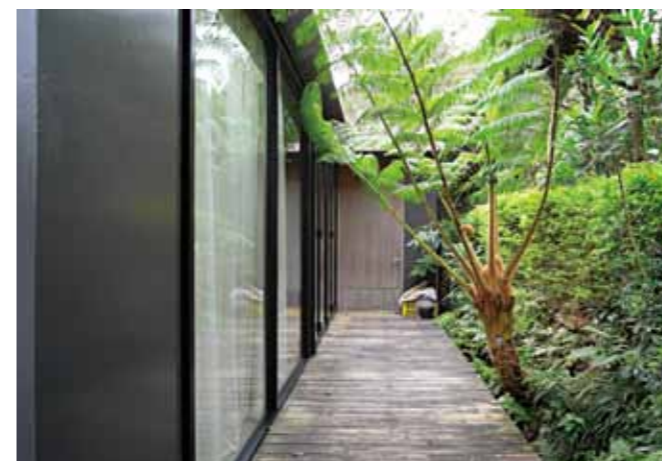
取材当日、「とりあえずオフィスに寄ってもらえませんか、そこからは多くの車で一緒に行きましょう…」という話だったので、まずは見学がてら陳さんの主宰する「十月設計」に出掛けていきました。高級マンションの地下のワンフロア全部を使った広々とした設計事務所で、広さは、そう、100-120坪ほどでしょうか。その大空間の中で大勢のスタッフが忙しそうにたち働いていました。ここは二層分の天井高

を持つ空間なので、両サイドにギャラリー風のロフトが設けてあります。そして片側のギャラリーの壁際一面は本と資料の棚になっていました。本の量に心誘われてギャラリーに上がってみると、そこには、ちょっと座って読書するためのベンチや、資料の扱げられる書見台などがさりげなくしつらえてあり、なかなか魅力的な図書スペースになっていました。考えてみれば当然ですよね、誠品書店をはじめ大当たりしている書店を数多く手がけている陳さんにとっては、本のための環境をつくるのは、いわば「お手のもの」なのですから。

陽明山は台北市の郊外、故宮博物院の奥にある国家公園(日本流



下の階の地上から縁に包まれた「陽明山のすまい」を見上げる。下階の屋根は広々としたルーフトラスになっている



果樹園と畑の脇をすり抜け、樹木をくぐり抜けると忽然と現れるウッドデッキのアプローチ。「おや、こんなところに…」思わず「隠れ家」を発見した気分



下階は仕事場(書斎)として使われている。青い座布団のある場所は「堀ごたつ」。天井が低めなので、床に座り込みたくなる気持ち、よく分かります

に言えば国立公園)です。この一角に陳さんの自邸「陽明山のすまい」があります。あたり一帯、豊かな自然に抱かれた高級住宅地ですが、国家公園内ということで建築的な法規制は厳しく、原則的には新築は禁止されていると聞きました。そうしたなか、陳さんのすまいは大地主の敷地の一部を借地するようなかたちで建てられています。陳さんによれば「地主さんに気に入ってもらえて建てさせてもらった…」とかで、それが、法的にはどういう扱いになっているのか、借地の条件がどうなっているかなど、いまひとつ判然としませんでした。また、真偽のほどは分かりませんが(陳さんはときどき真顔で人をおつぐ冗談を言う人です)、台北市内は家賃がとても高いので、市内のそこそこいい場所で、それなりの広さのマンションを6年間借りた家賃と、新築の工事費は「たいして変わらなかった」そうです。

そのようにして新築された住宅は、鉄骨とガラスのいたってシンプルな建物です。傾斜地に建てられているので、階数が表現しにくいのですが、上下に階があり、下階の背後は崖の擁壁を兼ねています。メインのフロアは上階にあり、玄関へのアプローチもここからです。車を止め、大家さんの屋敷に入る古色蒼然とした大きな木戸をギョーと開け、果樹園と畑を横目で見つつ、下り坂の小径を40メートルほど下りると、ようやくウッドデッキのアプローチに辿り着きます。そこまでは鬱蒼とした樹木に遮られて建物はまったく見えず、建物は不意打ち的に目の前に現れるので、最初に訪れたとき、私は隠れ家を発見したような気分になりました。設計する際、陳さんはこうしたどこか秘密めかした雰囲気も狙っていたかもしれません。そして、樹々の下をくぐり抜けて行く、いくぶん薄暗く閉じた印象とは対照的に、玄関ドアを開けると目の前には明るく大きく広がるワンルームの室内が待ち受けています。正面の眼下に開けた風景を望む面は、床から天井まで、全面ガラスの開口部。ほとんどが嵌め殺しのガラスなので、視覚的には大きな開放感があり、逆に、感覚的には閉じられることで守られている安心感があります。先ほど私は「隠れ家」という言葉を使いましたが、室内には「ガラスで囲い取られた密室の趣き」もありました。

ここで、^{プラン}平面図をご覧ください。

誰もが、まず、家全体がスッキリ、サッパリ、ユツクリしていて、まったく所帯じみた感じがなく気づくでしょう。理由は簡単で、陳さんは優雅な独身貴族なのです。独身貴族といえば、先ほど私は、若い

ころのフィリップ・ジョンソンのことを思い浮かべたと書きましたが、ガラスに囲まれた独身男性の独り住まいという意味でも、ジョンソンの「ガラスの家」とも共通するところがあります。そう思ってプランを見ると、玄関を入った左手にキッチン、その前方にダイニング、ダイニングと隣り合わせにリビング、そして、クロゼット裏手に寝室というぐあいに、プランの構成も「ガラスの家」とよく似ているのです…といっても、陳さんが「ガラスの家」のプランを下敷きにしたという意味ではありません。そうではなく、廊下や間仕切り壁を廃したワンルームのスペースに、住宅に必要なスペースをバランス良く配置していくと、辿り着く解答のひとつが「このプランになる」ということなのです。

読者はプランを眺めているうちに、いつのまにか平面図の中を目で歩き回っている自分に気づくかもしれません。実際にも、行き止まりのない間取りに加えて、歩き回ることによって視界が次々に変化していき、驚きと、発見と、感嘆と、納得を愉しむこととなりますから、私もついつい建物の中を何度もぐるぐる巡り歩いていました。ル・コルビュジェは「建築的散策路」という言葉を使いましたが、この住宅は、その「建築的散策路」が巧みに盛り込まれているのが大きな見どころかもしれません。

ところで。室内散策の道すがら、居心地の良さそうなスペースに心誘われて、必ずふと足を止めてしまう場所があります。それは、リビングと寝室コーナーの間にしつらえられた、ゆったりした作り付けソファのコーナーです。ここは、三方が壁で囲まれたデイベッド的な場所で、袖壁にはテレビが、背後の壁には本棚が備え付けられています。眼下に谷とその向こうに広がる街の景色を見晴らす大ガラスの開口部ですから、妙な表現になりますが「開かれた洞窟」という感じ。陳さんの居心地に対する動物的なカンの良さはこういうところに、もっともよくあらわれているのです。もしかしたら、この住宅の重心は「隠れ家の中の隠れ家」とも呼ぶべき、このコーナーなのかもしれません。

さて、ここまで主階のことについて書いてきましたが、最後に下の階の書斎にも触れておきましょう。デイベッドの前にある階段を下りると、ここにもあっけらかんとした広がりがあります。片側に掘ごたつ式に作り付けられた長いデスクにはパソコンが置かれているので、書斎または仕事場であることは確かですが、トイレとシャワー室など水回りもあり、たっぷりした収納量のあるクロゼットもありますか



「ベッドルーム」…というより「ベッド・コーナー」。衝立状の壁の向こう側にバスルームがある



バスルーム。バスタブはなく、二段に掘り下げた凹みにお湯を溜める。いくぶんヒンヤリした印象だが、台北は亜熱帯気候だから、これでもいいのかも



リビングと寝室の間にあるデイベッドのコーナー。手前の壁際からチラリとのぞいている黒いものは壁掛けテレビ。そのテレビを観るもよし、読書するもよし、外の景色を眺めるもよし、午睡を愉しむもよし…、とっておきの居心地



ダイニングテーブルからリビング方向を見る。白と淡いベージュのトーンで統一された広々とした室内。さりげなく飾られた小物や彫刻のコレクションを眺めるのも楽しい



リビングの飾り棚の裏側にあるキッチン。キッチンと玄関を通り抜けバスルームまで一直線に延びる抜けのよい動線



眼下の夜景を独り占めにする素晴らしいロケーション。外の風景と室内がガラスに二重写しになって、視覚的に面白い効果生まれている

ら、ゲストルームとして計画されたのでしょう。

ひととおり見学を終えると、いつのまにかあたりは黄昏れていました。陳さんはいそいそとキャンドルを灯し、ジャズを流し、ワインを抜いて、

夜景を愛でる準備をはじめてくれています。こういうもてなしぶりが実にスマートで心憎いのです。蒼然と暮れていく空、その下に広がる街の灯も次第に賑やかに煌めきはじまりました。

なかむら・よしふみ——建築家/1948年生まれ。

武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、宍道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。

主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT[2001]、伊丹十三記念館[2007]など。

主な著書:「住宅巡礼」[新潮社/2000]、「住宅読本」[新潮社/2004]、「意中の建築 上・下」[新潮社/2005]、「Come on-a my house」[ラトルズ/2009]、「普通の住宅、普通の別荘」[TOTO出版/2010]など。